

編集後記

「胃と腸」も10年を過ぎ、11年目になった。益々発展の道をたどっているようで、読者の皆様と共に、心から喜びたいと思う。

本号は、恒例の年2回の症例・研究の特集号であるが、研究欄は、胃3、症例欄は、胃7、腸6で、早期胃癌研究会症例は、今回は胃の2例であった。腸の6例はいずれもすぐれた症例報告であり、本誌が腸を益々大きく包含してきていることは喜ぶべきことかと考えられる。

研究欄では、マウス胃における萎縮性胃炎作成の研究（同種胃抗原感作）で、その意欲を買いたい。更に研究を続けられ、その目的を達成されんことを願ってやまない。「胃穿刺吸引細胞診による胃粘膜下腫瘍の確定診断に関する研究」は、その安全性をとりたい。成績も優れており、多くの方々の追試を期待する。

症例では、「残胃に発生したⅡa型微小胃癌の1例」が、5mmの微小早期胃癌で、胃切除後27年目に発見したきわめて珍しい症例である。これがきわめて珍しいということは、切除胃の検査がないがしろにされていることを意味し、特に内視鏡検査に努力が求められている点に、大かたの注意を喚起しておきたい。「幽門前部潰瘍の穿通に続発した Double pylorus」はこれまたきわめて珍しい例で、特にこれを内視鏡で証明したことは特記すべきであろう。紙面がつかたが、腸疾患の少ない本邦では、その症例報告がより貴重となる。今後そのことを希望したい。

* * *

佐野量造博士が亡くなられた。御冥福をお祈りしたい。

< 崎田 隆夫 >

< 編集 > 早期胃癌研究会